

豐前國英山
之哀桑

昭和十年十一月廿五日
第三種
（每日發行）
（每月發行）
（每季發行）
（每年發行）
第百十號
第十年十一月號

通類編

上之卷

第十年十一月號



無代進呈

進呈方法

オリヂナルクリーム

大瓶（五十錢）の空函

一個引換に小瓶 個進呈

オリヂナルクリーム

小瓶（二十五錢）の空函

一個引換に別小瓶 個進呈



オリヂナル クリーム

グンシニバ

本 舖
株式會社 安藤井筒堂

東京市日本區水天宮前

風味必ず御氣に召す

天ぷら御料理

季節向御料理

佛蘭西御料理

芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

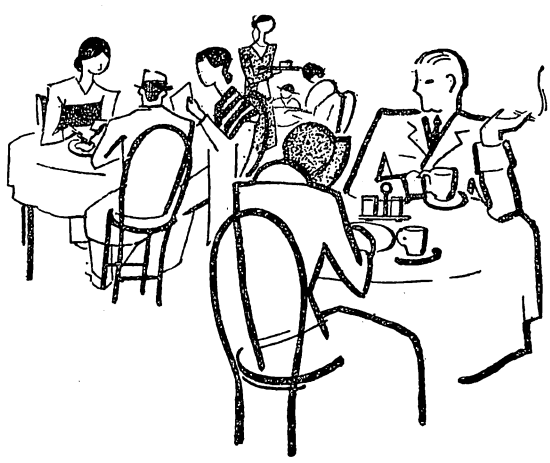
道頓堀戎橋北詰

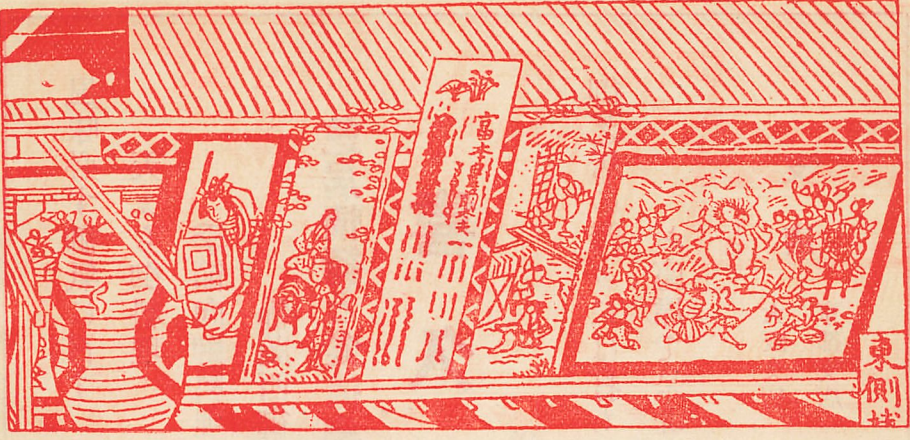
御芝居の歸りには打ち揃ふて

お座席では非御會食を！

支店

- 大阪支店 心齋橋筋八幡筋角
- 京都支店 北新地裏町
- 木屋町ドングリ橋





東側註

◇道頓堀・第一百輯・十一月號◇

★ 繪 口 ★
 中座「彦山権現誓助劍」各舞臺面・延若六助・「鎮撫使さんとお加代」舞臺面・魁車お園・「小袖ものぐるひ」舞臺面・「地獄變」舞臺面・壽三郎繪師良秀・「五千両の尼庄」舞臺面・「雷と船頭」舞臺面・歌舞伎座・五郎乳母おかつ・「二歩前」・「雪の夜の街」・宣傳万能「無閑マダム」秘法の妙薬・各舞臺面・南座「菅原傳授手習鑑」我當松王丸・狂藏時平公・勘彌梅王・扇雀櫻丸・武部源藏・「生きてゐる小平次」各場面・勘彌小平次・鶴之助おちか・扇雀治兵衛・松蓮小春・成太郎おさん・秀郎孫右衛門・辨天小僧舞臺面浪花座・栗島すみ子・かむろ・奴の小萬・栗島壽子・小女房・栗島緋沙子・島田小村・栗島千枝子・森勝美・葛城濱子・中田・權四郎・山口平次・梅野井女房おえん・都築幸太郎・瀧あけみ・笈川火夫

★ 表 紙 長谷川小信氏 所有錦書

地獄變のことなど 高安吸江 (三)

「地獄變」の劇化 川尻清譚 (四)

歌舞伎相讀時代 高谷伸 (七)

扇雀、勘彌、藏當 大橋孝一郎 (一〇)

新作上演の可否 西田眞三郎 (三)

口上幕小論 山口廣一 (三)

東京で拾つた話 曾我廼家五郎 (六)

空財布 高谷伸 鳥江鏡也 (六)

梅野井秀男を語る會 高谷伸 西尾福三郎 村井富男 (八)

田 森 板藤 大 勝



漫 畫
カ ツ ト、 扉
編 輯 後 記
村 上 勝 (四)

ライカで描いた青年歌舞伎	大橋孝一郎 (三八)	
業話	巡土 信州の相馬踊	會我廻家大磯 (三六)
	思はぬ山行	會我廻家蝶六 (三七)
芝居 印象記	十吾天外を圍んで	笑ひを語る夕
	東京新派の二階から	姉小路孝 (三〇)
	御曹司三花形	秋口好光 (二六)
	芝居 印象記	西尾福三郎 (三三)
	變稿	龜屋原徳 (三七)
	地獄書葉	金子洋文 (二六)
	變稿	額田六福 (二六)
	私の女房役と劇團の變轉 (2)	都築文男 (三)
	樂屋の梅野井舞臺の梅野井	森ほのほ (三)

天下之銘酒

シラユキ

白雲

錦繡の秋

芳醇の酔

摂津伊丹灘

小西酒造株式会社





十一月の中座
大歌舞伎

「彦山権現誓助劍」

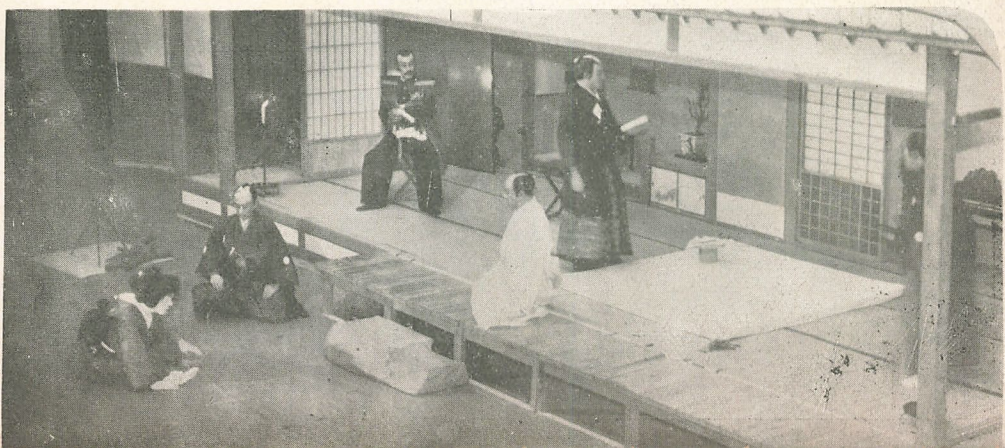
上・舞臺面

下・毛谷村六助：實川延若



「鎮撫使さんとお加代」

鎮撫使總督西園寺公望卿	松本 錦吾
同 副總督川路利泰	阪東壽三郎
參謀 河内山半吾	市川右團次
隊士 折田	市川段猿
鳥取藩 荒木十内	市川九團治
松江藩 朝日丹吾	嵐 吉三郎
同 乙部九郎兵衛	中村 霞仙
鍼醫者 玄丹	市川箱登羅
同 娘お加代	中村 魁車
松江筆頭家老大橋茂右衛門	實川 延若



安部保名
葛の葉姫
女童加茂
奴與勘平

林長三郎
實川延三郎
實川延之助
市川右團次

「小袖ものぐるひ」



「彦山權現誓助劍」

一味齋娘お團……中村魁車

「彦山權現誓助劍」

毛谷村六助
微塵彈正
母 祐幸
柚斧右衛門
一味齋娘お園

實川延若
市川段猿
市川蕙女
市川右團次
中村魁車



流行歌

おどろき

新編
喜代丸

てれらゆに様
夫 君 藤 佐



ドーコレイハイ

流行歌

おどろき

ほろり
おどろき

かど



ドーコレート

★クリスマス
★特
★

せいの鐘 の院

星架坡新加坡

アリア・エガ ゴ

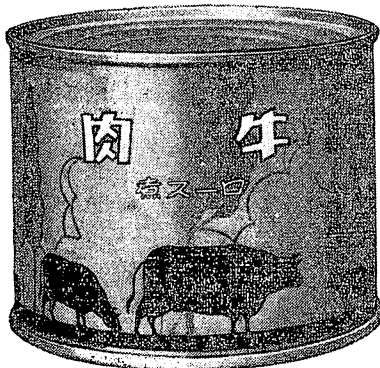
星架坡新加坡



ドーコレルタスリク

金鶏印罐詰 二大製品

- 1. 純良精選の牛肉
で御座います
- 1. 不意の御來客に
- 1. 御酒ビールの御友に
- 1. キャンピングに
- 1. ハイキングに
- 1. 各地百貨店
著名食料品店
に販賣致して居ります
- 1. キンケイ印を御指定下さ
い

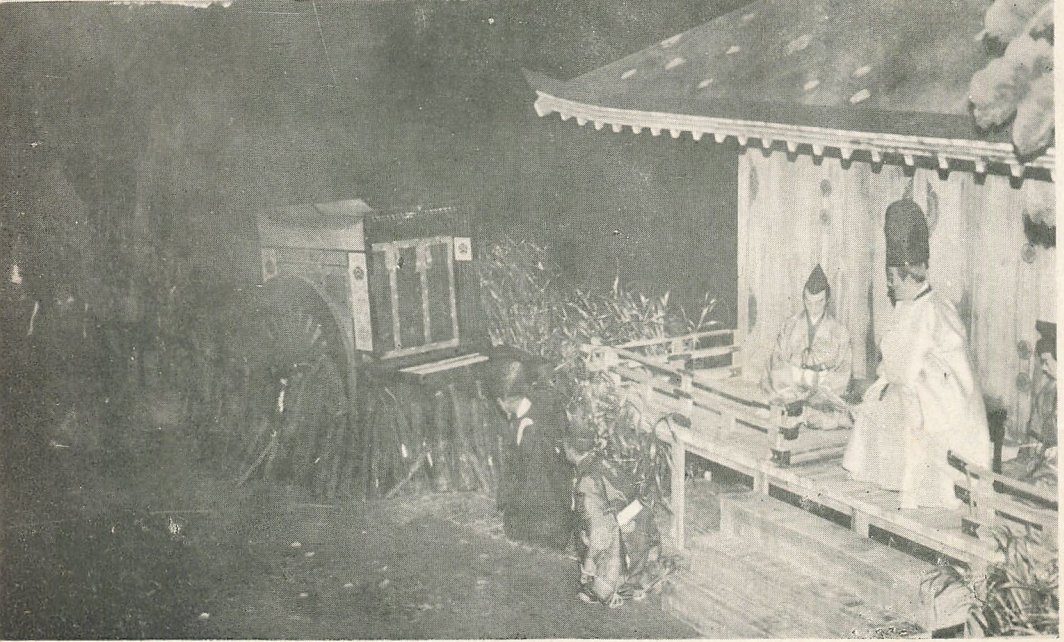


白酒・飲料水・罐詰

株式会社 横山商店

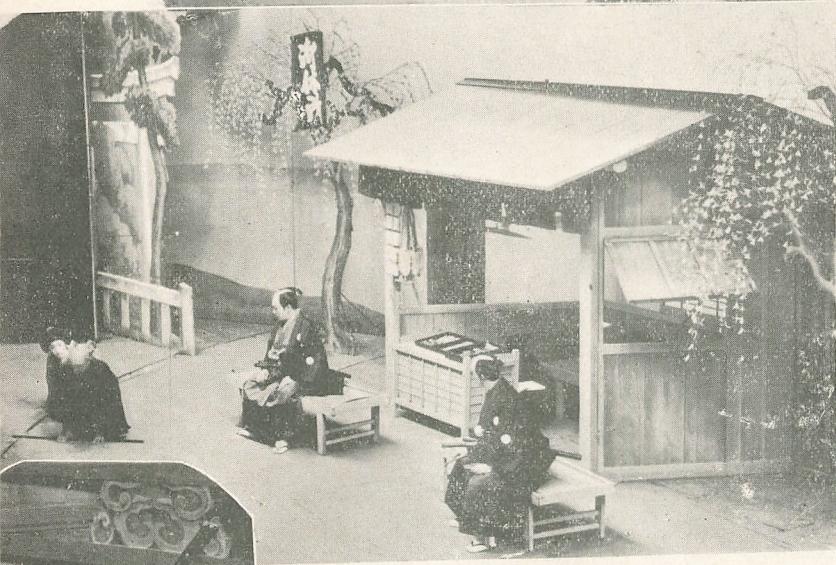
大阪東區豊後町三

「變 獄 地」



繪師 良秀
 阪東壽三郎
 弟子 秀信
 林長三郎
 横川 僧都
 市川段猿
 良秀の娘 夕顔
 中村芳子
 堀川の若殿 嵐吉三郎
 臣 泰時
 市川九團次
 堀川の大殿 實川延若

「五千兩の尼庄」

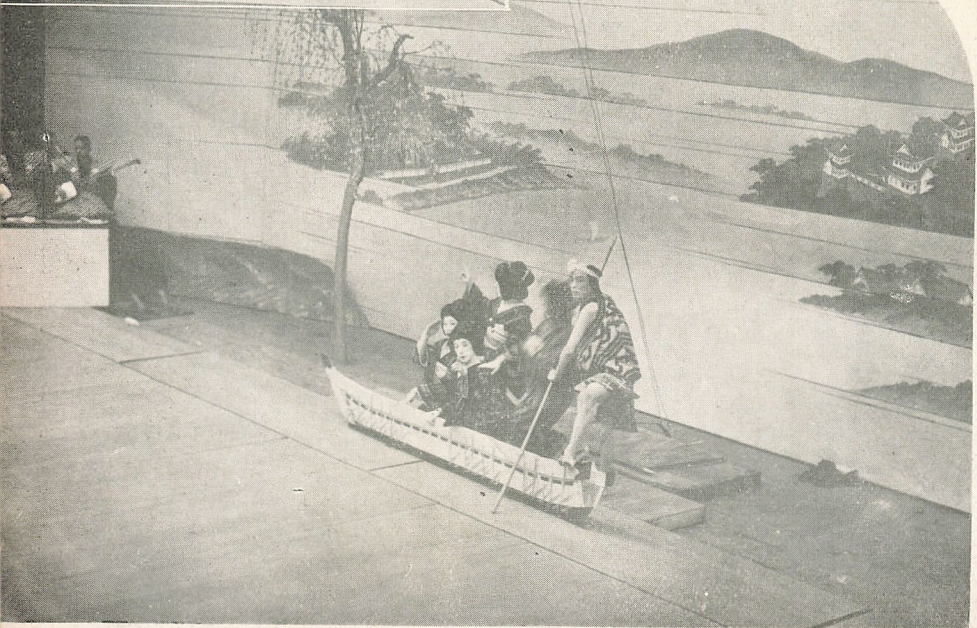


エリサベタのお辰	團八娘小さん	色比丘尼良順	賣女おみを	町家の女房	下ッ引三公	目明し金藏	同	町	茶店親爺	見筈らしい職人	公事道樂の老人	口入作次郎	近江屋半次郎	油屋治助	中村橋之助	嵐團八	與力桑原八右衛門	墨江武山	尼ヶ崎屋庄兵衛
中村魁車	實川延三郎	松本錦吾	中村福太郎	市川蓮女	中村扇	市川玉太郎	市川市昇	中村鷹之助	實川鷹正	實川八百藏	市川箱登羅	市川九團次	嵐吉三郎	市川右團次	中村霞仙	市川段猿	市川市藏	阪東壽三郎	實川延若

娘 丁 雷 船
 お 稚 頭
 と 幸 卯
 し 吉 神 吉 卯
 の 神 吉 卯
 の 神 吉 卯

中 村 芳 子
 實 川 延 之 助
 市 川 右 團 次
 市 川 右 團 次

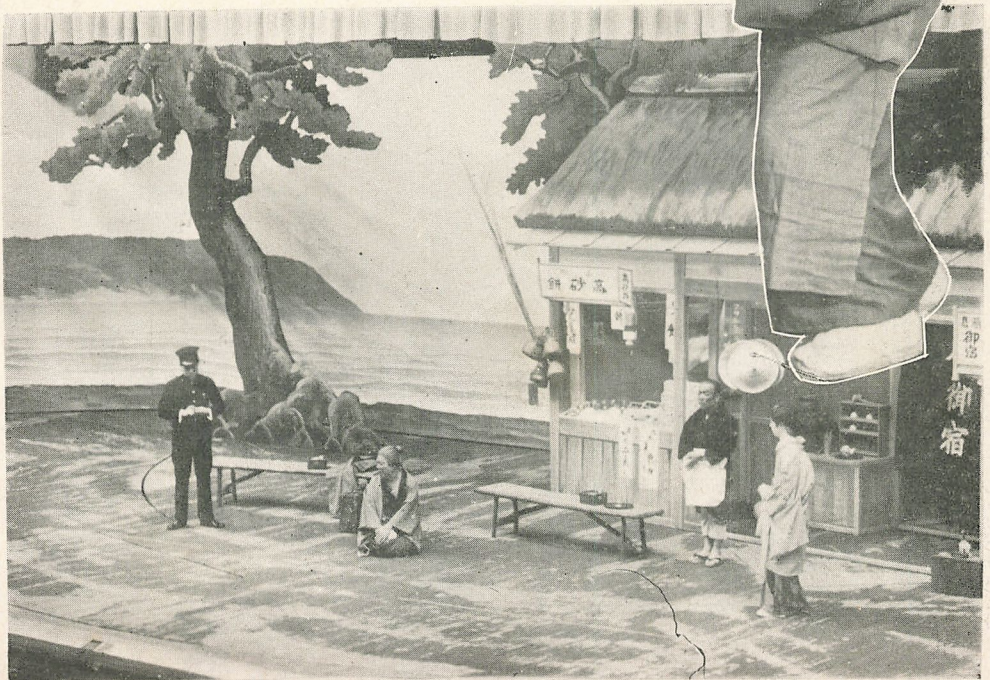
「雷
 と
 船
 頭」





• 面臺舞街の夜の雪 •

• 面臺舞前歩一 •



座伎舞歌の月一十
劇郎五家廻我曾



乳母おかつ……五郎

曾我禮家五郎劇

新月はつりて目知なかくて
 新作之秘藏狂言で今ま
 皆様が嘗て御覽になつた
 事のない程の粒揃ひしかも
 五郎が自慢の舞台は腕に
 よりによまきかけての大熱演
 笑つて笑つて笑ひ披いて笑
 ひと涙が止まないと云ふ面
 白いとは講合の御膳立!

平常興行とマチネーは上演狂言が
 變つております

宣傳の世の中へ響く「エモ」篇
 第一 宣傳
 新作! 本至厚高の力作篇

第二 一歩
 彼女は何をたか、鼻刺の利した力作!

第三 無閑マム
 笑ひ下見せる處の人生篇!

第四 雲の夜の街
 お腹の皮のよれると、言葉が換る新作!

第五 秘法
 の妙薬

毎々四時半開幕
 三時半の各等割引價段

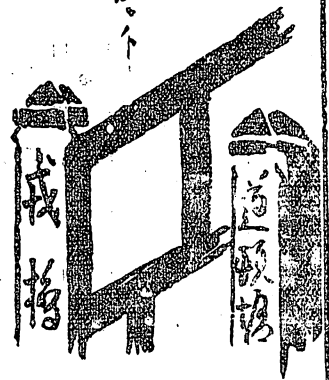
御用合は富田區区役所へ
 學安上運動は西白土五郎へ
 (成) 三三三

日曜 二百十日十七日午前十一時半開幕
 第二場 嫁の里
 第一場 妻の草
 第二場 紙
 第三場 蔭
 第四場 電
 新聞 三十五錢
 新聞 三十五錢
 新聞 三十五錢
 新聞 三十五錢

能
 前
 二
 場
 能
 前
 一
 場

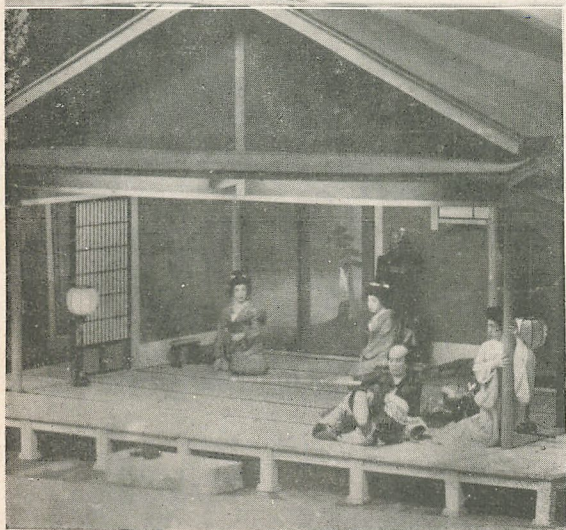
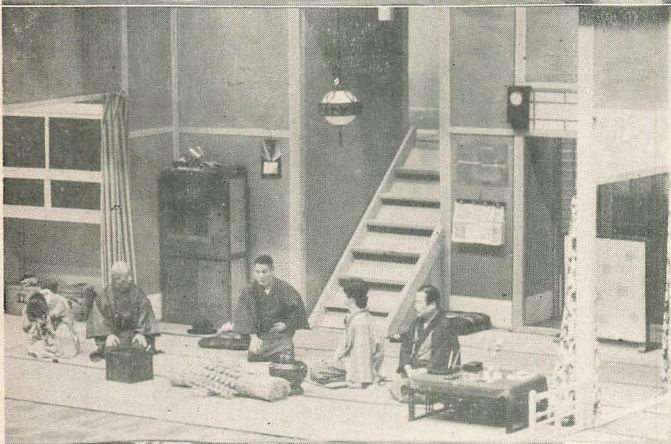
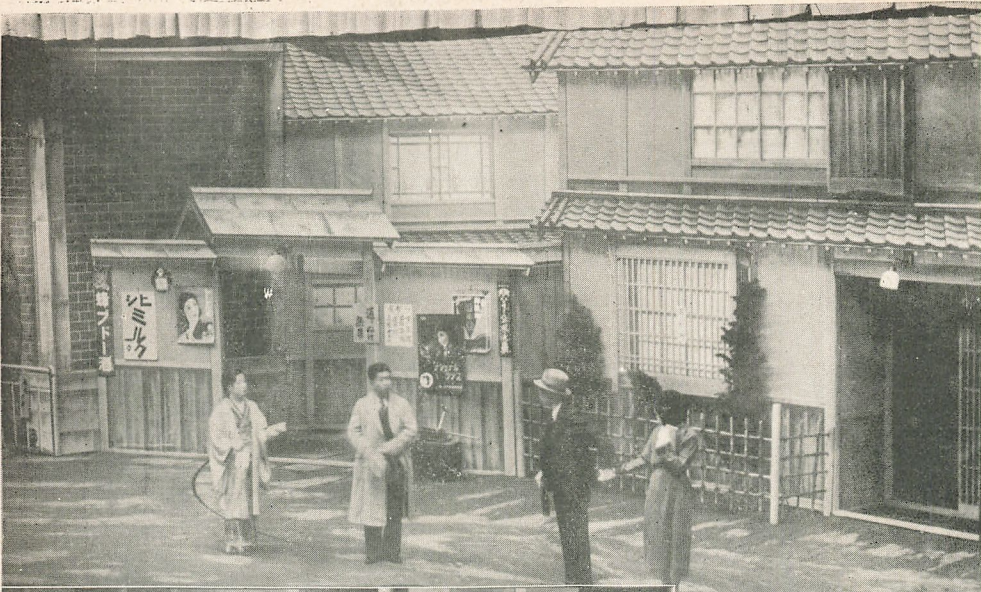
初日割引價段
 櫻。三十五錢
 菊。五十五錢
 參等七十錢
 貳等二一圓
 壹等二圓

魚川野 料理
 魚川野 料理
 魚川野 料理



電話南
 四八二〇
 九五四
 四八四

柴藤食堂
 二階 椅子席
 三階 宴會場



上・宣傳万能
 中・無閑マダム
 下・秘法の妙薬
 各舞臺面

舍人松王丸…我 當

「菅原傳授手習鑑」

十一月の南座
東西合同花形
大歌舞伎



「車曳の場」

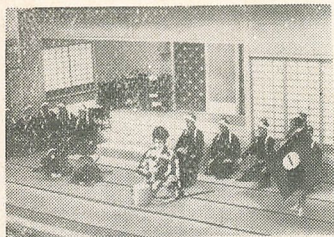
藤原時平公…珪 藏

海王丸…勘 彌

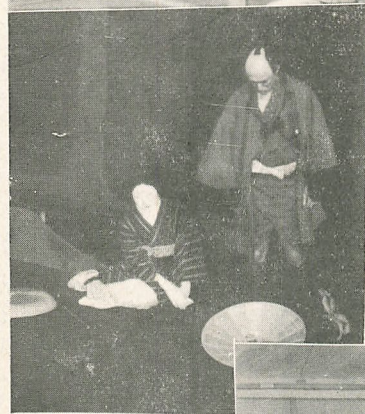
松王丸…我 當

櫻丸…扇 雀

武部源藏…扇 雀



寺子屋舞臺面



「小平次あるて生きて」

各場面



役者小幡小平次・勘彌
女房おちか・鶴之助





• 面 臺 舞 各 •



紙屋治兵衛
 紀の國屋小春
 女房おさん
 粉屋孫右衛門



扇松成秀
 太
 雀 菟 郎



「燧 炬 の 雨 時」



天保安兵衛

一キートル一才

犬塚 稔 監督 復歸第一回作品

林 長二郎 主演

田嘉子 演出 別演

高田の馬場十八人斬の
安兵衛が颯爽たる姿を
天保に現はす!

宏	千	花	柳	中	金	山	高	永	志
橋	曲	岡	村	井	路	松	井	賀	
助	照	里	菊	さく	吉	小	錦	柳	靖
演	子	子	子	く	松	二	之	太	郎
	子	子	子	子	郎	人	助	郎	郎

切封日近



裂 小・具道小

裳 衣 貸

素人演藝會
宴會の催物
春秋溫習會
婚禮の衣裳

其他一般の衣裳多少に不拘御利用
さし御來客の相談に應じ便利よく
お取り計らひ致す……

松竹衣裳部

本店

東京支店

大阪市浪速區南坂町松竹ビル内
電話 戎 五 六 三 四 番

東京市淺草區駒形町二十三番地
電話 淺草 六 六 六 一 番



「辨天小僧女男白浪」

上…濱松屋の場

下…勢揃の場

辨天小僧菊之助	勘	彌
忠信利平	成太郎	
赤星重三郎	松	莚
南郷力丸	扇	雀
日本駄右衛門	我	當



舞踊「かむろ」 (上の巻)

「女伊達吾妻家産」 (下の巻)

上……かむろ 栗島すみ子

下……奴の小萬 栗島すみ子

小女房 栗島壽子



座花浪の月一十

座一子みす島栗



(上) 「戀愛三昧」

緋沙子……栗島すみ子
 小村仲次郎……島田嘉七

(下) 「ちかい」

千枝子……栗島すみ子
 勝美……森英二郎
 朝倉濱子……葛城文子



十一月の角座
關西新派劇



(上、中) 「猿橋雪夜譚」

勝沿の權四郎……中田正造
 人足頭平 次……山口俊雄
 權四郎女房 おえん……梅野井秀男
 鳥澤の幸太郎……都築文男

(下) 「船虫の唄」

あ け み……瀧 連子
 火夫 達 藏……笈川 武夫



近日封切

新標語・最も面白い新興映畫

曉の麗人

新興キネマ東京大泉撮影所
落成記念超特作映畫

新興脚本部共同原作
脚色・陶山密
監督・曾根千晴
撮影・古泉勝男

この空前の豪華配役を見よ!!
躍進!!新興キネマ總動員!!

高田稔	鳥橋弘一	高津慶子
河津清三郎	有馬是馬	春野蝶々
由利健次	松尾文人	江川なほみ
小宮一晃	三樹豊	御影公子
若葉馨	淺田健二	歌川八重子
小阪信夫	清水將夫	特別應援出演
生方壯兒	立松晃	~~~~~
岡崎光彦	山路ふみ子	月形龍之助
南部章三	伏見信子	森靜子
大井正夫	伏見直江	久松三津枝
大友壯之介	霧立のぼる	

新興キネマ東京大泉撮影所
高田プロ合同超特作・サウズン版

新興キネマ大坂支店

茶

西區女子會

茶

南區女子會

十一月號

藝雅·究研劇演·刊月
通 類 編

第十年

第 百 十 輯





『地獄變』のことなど

高安吸江

霜月の中座には地獄變が出るそうです。これは十月東劇で左國次一座の一番目にも上演されましたが、こちらのはそれとは別に作られたとか聞きました。

原作は芥川龍之介氏がたしか大正七年頃に書いたものだつたと思ひます。宇治拾遺から取つたといふ話で、成程その物語の卷三の六には「繪佛師良秀家のやくるを見て悦ぶ事」といふ條があります。

隣から火が出て我家が類焼する、その向側に立て良秀は此れを眺めながら頷いては又時々笑つてゐます。それで氣でも狂ふたのでないかと人々が尋ねると「今まで描いてゐた不動尊の火災の拙かつたことが今わかつた。佛さへ巧く畫けば百千の家を焼いても一向差支ない。何の藝能もない輩は家財を大事にするがよい」と嘲笑しました。

唯これだけが拾遺に出てゐる全部です。それで若しやと思つて丹鶴叢書本の今昔物語を虱殺に調べて見ましたが、それらしいのは見當りません。

芥川氏はつまり此様な簡單な話からヒントを得てあの物凄い地獄變の屏風物語を創作したのです。秦の始皇が隨の煬帝との評ある大殿、それに入出入の繪師で脊の低い骨と皮とに瘦せた、意地の悪い、獸心を憶はせるやうな赤い唇、猿に似た容貌、各箇で樗食、驕慢で耻知らずと見える良秀、その横道者の良秀がもつ唯一の人間味として、物狂はしい程に愛してゐる一人娘を美装させて櫛櫛毛の車に乗せたまゝ、無慘にも焼き殺す、その慘状をその儘良秀に寫生させるのです。

一寸經が島の清盛や面作りの夜叉王を想起させる物語ではありますが、それ等に比べてあまりにも人間離れの



した怪奇(かいぎ)的なもので、日本(にほん)よりも寧ろ支那(しな)趣味(しゆみ)の感(かん)がします。自己(じこ)の情慾(じやうよく)を満足(まんじつ)せしめるためには、人間(にんげん)として考(か)へ難(がた)い程(ほど)極端(ごくたん)なことをも、案外(あんげい)平氣(へいけい)でやりとげるやうな話(わ)題(だい)が至(いた)る處(ところ)に見(み)受けられるあの老(ら)大(だい)國(こく)には、こんな慘虐(さんげつ)で冷酷(れいこ)な事件(じけん)は日常(にちじやう)茶飯(ちあはん)とも云(い)ふべきです。

唯(ただ)こゝにはそうした怪奇(かいぎ)的な變態(へんたい)趣味(しゆみ)を藝術(げいじゆつ)のための犠牲(ぎせい)といふ煙幕(えんまく)で包(つ)み隠(かく)さうとしてゐますが、醜態(しうたい)はやはり醜態(しうたい)に相違(さうい)ありません。こんなことを云(い)ふと、醜(みにく)いものゝ中(なか)に美(うつく)しいものを見(み)得(え)ない凡俗(ぼんぞく)共(ども)と、作者(さくしや)から嘲(あざわら)笑(わら)せられるかも知(し)らぬが、一般(いぱん)の人(ひと)にはそうしたヒネクれた見(み)方(かた)が出來(き)ないのは當(あた)然(ぜん)でしやう。

さて此(この)作(さく)がどういふ風(ふう)に劇化(げきか)されたか、今(こん)回(かい)のはもとより東(とう)劇(げき)のもまだ聞(き)いてはゐませんが、少(すく)くとも此(この)良(りやう)秀(しゆ)といふ役柄(やくがら)が左(ひだり)團次(だんじ)のものでないことだけは判(はん)然(ぜん)と云(い)ひ得(え)ます。同じ(おな)く斷末(だんま)魔(ま)の苦(くる)にしても夜叉(やしゃ)王(わう)の娘(むすめ)と炎熱(えんねつ)地(ち)獄(ごく)の大(だい)苦(くる)患(わづ)と、其(その)經(き)過(か)や心持(こころもち)に於(お)て雲泥(うんぬ)の差(さ)があるのは明(あ)かか、若(も)左(ひだり)團次(だんじ)が原(げん)作(さく)に描(か)かれた良(りやう)秀(しゆ)を其(その)まゝ描(くわ)寫(しや)することに成(せい)功(こう)する柄(がら)ならば、恐(おそ)らく是迄(こゝまで)にあれ程(ほど)大衆(たいしゆ)的(てき)な名聲(めいせい)を贏(か)ち得(え)なかつたでしやう。

同(どう)様(じやう)にまた壽三(じゆさん)郎(らう)にも此(この)役(やく)が不(ふ)向(きやう)きであることは確(たしか)で優(ゆう)の太(み)くて強(つよ)い線(せん)は、良(りやう)秀(しゆ)の細(こ)くて鋭(えい)いとは全(ま)く別(べつ)趣(しゆ)のものである上に、腹(はら)の奥底(おくぞこ)には極(ごく)めて弱(よわ)々(々)しい分子(ぶんし)がひそんでゐる優(ゆう)の性分(せいぶん)は、彌(い)まこつした役柄(やくがら)に不(ふ)適(た)當(たう)であるのを語(かた)るものであります。

それぞ今(こん)回(かい)此(この)地(ち)獄(ごく)變(へん)の上(じやう)演(えん)について我(われ)々(々)の興味(きやうみ)をひくのは、あの妙筆(めうひつ)によつてひきつけられる怪奇(かいぎ)的(てき)な其(その)内(うち)容(よう)ではなくして、新(あら)しい脚色(きゃくしき)と演(えん)出(しゆつ)によつてどの程(ほど)まで變態(へんたい)的(てき)グロ(ぐ)味(み)から人間的(にんげんてき)に還(かへ)元(げん)せられ得(え)たか、云(い)ひかへると一般(いぱん)の同感(どうかん)を得(え)るまで、どういふ風(ふう)な新脚色(しんきゃくしき)と新演(しんえん)出(しゆつ)とが苦心(くるしん)されたかといふ點(てん)にあると思(おも)はれま

す。鎮撫(ちんぶ)使(し)さんとお加代(かよ)その他(た)の新(しん)作(さく)について一(い)々(々)述(の)べる餘裕(よゆう)をもちませんが、型物(かもの)の妙趣(めうしゆ)もさることながら、今(こん)回(かい)の樣(やう)に新(しん)作(さく)を並(なら)べ立(た)てることも亦(また)少(すく)なからず興味(きやうみ)をそゝるもので、唯(ただ)それが俳優(はいゆう)の柄(がら)と一般(いぱん)の趣味(しゆみ)とに合致(がっぢ)するや否(いな)やについては特(とく)に考(こう)慮(りよ)を要(よう)すべき問題(もんだい)でありま

「地獄變」の劇化

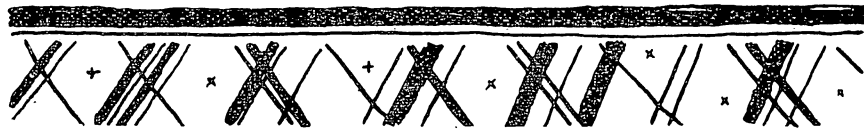
川尻清潭

芥川龍之介氏の傑作小説『地獄變』の劇化は、

先代守田勘彌丈が、いまだ帝劇に在勤中、其計畫だけはあつたものの、適當な脚色者を得ない爲に中止となり、其後帝劇が松竹の經營に移つてから再び此話が持上つて、改めて眞山青果氏に依頼した所、『どうも面白い芝居にはなりにくい』との事であつた。又々中止、さうして勘彌丈の没後、今度は市川左團次丈の爲に此小説の劇化を斷行する運びとなつたものであるが、前後の出し物の關係上機會を得ず、漸く東劇の十月興行に上演を決定した譯で松竹幕内部の協議の結果、吉井勇氏に脚色を一任する話が進み、斯く云ふ小生が全權を帯びて、漂泊の歌人たる吉井勇氏の出先きを突留めて訪問し、事の次第を物語つて、脚色をお願ひした段

取である。

打絶えて逢ふ事のなかつた吉井氏に對しては、甚だ突然な御依頼ではあつたものの、左團次丈とは既に長い親交のある吉井さんであり、尙芥川龍之介氏の名作として、豫て愛讀をされてゐた『地獄變』と云ふ好材料の提供であり、更に久しく脚本に筆を染めなかつた吉井さんであつた事が、二つ三つと重り合つた爲もあつて『地獄變』ならば脚色をして見てもいゝが、もう一度讀返へして、筋立てを組上げて見てもいゝから確答をしやう』との話で、要するに大體の承諾を得てお別れをしたのである。其後一週間程を経てから吉井氏の書状に『何分原作が問題の名篇であるだけ、劇化の趣向もむづかしく、一時はお斷りをする決心であつたが、漸



く筋立の腹案がまとまつたに就て、改めてお引受けをする』との返事があり、それから吉井氏は千葉の鹿野山の霧深い閑舎に立籠つて専心執筆を續け、前後五日間の精進を以て、立派な脚色を送り届けられたのである。

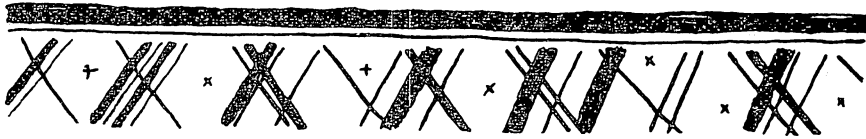
右脚本の出来上りと共に、主演者の左團次又は脚本と原作とを照合せて研究に没頭する一方、舞臺装置と考證とを小村雪岱氏に御依頼したのは、最初守田勘彌丈が此芝居を仕たいと考へた時分、小村氏に相談をした事もあつて、小村氏も亦夙に『地獄變』の愛讀者であつた所から、早くから装置と考證に就ての豫備智識が貯へられてゐた譯で道具帳の進行も順調にはかどり、比較的製作に餘日のあつた事も、一層舞臺美術の粹を盡くし得た次第である。

所で爰に一つの難問題は、脚本の第五場に當る雪解の御所の座前に於て、檳榔毛の車の中へ一人の上臈を入れて、これに猛火を掛けて焼き捨てる場面があつて、大谷社長は『此車を焼く仕掛けを寫實にして、充分の凄さを出したい、モシそれが

うまく行かないやうならば、此狂言は搦替へてもいゝ』と云ふ命令、其處で初めに全權を荷つて了つた小生は、勢ひ是等の仕事にも主事を勤めなければならぬ羽目となつたので、不取敢装置家の小村氏に、檳榔毛の御所車の下圖を乞ひ、それを小道具師の藤浪與兵衛君に見せて打合せると根が凝り性の藤浪君は、『やりませう、先づ鐵骨の車體を拵へて、其中へ硝子箱を嵌込んで女を入れれば、外から火に掛けても大丈夫です』との工夫であつたが、實際に火を掛ける段になると、自然煙硝を使用しなければならず、從て俳優の咽喉を痛める恐れもあるので、更に案を替へて、スチームカーテンに電氣照明を應用する計畫を立て、舞臺装置家の伊藤薫朔君を、此仕掛け物の專任に招聘したのである。

その雪解の御所の舞臺面は、後ろ一面の黒幕に夜の暗さを見せ、上手の高欄附の屋體には、堀川の大殿が短けいの下に坐り舞臺の中央に大きな檳榔毛の車を置据へ、其周圍に薪木を積み、觀客の見る前で此薪木へ、衛士が松明の火を移すと、そ





それが初めは白い煙から燃廣がつて段々に赤味を増し、次に火となつて閃めき上り、やがて車の底にバチ〜と燃え伸びて、一層の煙を濃くし、遂に車體に延焼して、煙々たる猛火は車の屋根を抜き全部に渡つて毒蛇の舌のからまる如く、或は赤く或は黄色く、又青く紫に火勢を強め、然も其車の中には、此火を見詰めてゐる畫師良秀の娘が、悶え苦しむ有様に幕の下りる迄、舞臺稽古の前々日に此車を燒く試演に、夜を徹した大苦心を拂つただけ、正に効果を擧げ得たものである。

それだけに此仕掛けの種を知りたがる好劇家もあつたが、事實スチームカーテンの一管にしても其壓力に對する噴霧口の大さと穴の向きなどに至るまで、悉く専門技師の設計を煩はしたものであり、又スチームを送り出す騒音を逃がす装置の設備は勿論、其外幾臺の照明器の配置、幾臺の煽風器の隠し場所、在來の金粉以外の火の子の新研究、火焰の伸縮、吹きぼやの使用、ドライアイスの應用等、實に比檳榔毛の車を燒く二分間の舞臺の陰には舞臺効果係、照明係、擬音係、小道具師の

多人數が、全く非常の努力を盡してゐたものである。

もう一つ其前幕の、良秀の畫室には良秀が『地獄變』の屏風を畫くモデルとして、弟子を鎖に縛しての苦しむ様を寫生する所、張が落ちて月光が差込む照明に、蓆の格子の影を、畫きかけの一双の屏風の角々へ寫し出した手際、木菟が飛び廻り遂に黒蛇に擲まれる苦しむ様の手際等も、亦見のがす事の出来ない効果として言添へて置きたい。

擬舞臺監督には脚色者自身が當る筈の所、足痛の爲に下山が出来ず、吉井氏のお弟子の田島淳君が助手として、極めて脚本に忠實な活躍振りを見せて、出演者の熱心と共に全部に統一が行届き東都十月劇壇の問題となつたものであるが、今月は又此地の顔見世月に、大阪での左團次と云はれる、理解のある壽三郎丈が、良秀の大役を勤める事は、浪花劇壇の一異彩として、必ずや評判の出し物として認め得られる事を信じるものである。



◆ 代時續相伎舞歌 ◆

—て就に彌勘雀扇當我—

伸 谷 高

時の流れといふものは怖ろしいもので、われらの名優として不死身のやうに思つてゐた鴈治郎もそれと若い間から對立してゐた仁左衛門も相次いで没してしまつた。妙なことに一世の名優といふ人が亡くなると前後してその對立者や共演者が言ひ合したやうに死んでいつか次の時代が現れてくる。

例をあげると明治十八年に初代實川延若が死ぬと一兩年のうちに若いのに可愛想だ俺が代れるものなら代つてやりたいと言つた尾上多見藏が死に、對立してゐた中村宗十郎が死んで、大阪劇壇は急に淋しくなつた。明治三十六年には五代目尾上菊五郎が死ぬと同じ年に九代目市川團十郎が死に、まもなく先代市川左團次も死んだ。

昨年から今年へかけて仁左衛門、

梅幸、鴈治郎と舞歌伎の三巨頭をつゞけて喪つた時、何となく不思議な感がした。明治中期はまだ生れない以前、團菊左の死は幼年時代の上に東京の出来事でも知らなかつた筆者ではあるが、鴈仁梅幸の訃を聞いた時、その二つの場合もかうしたものであらうかとしみじみ感じたものだつた。

團十郎の時もさうだつたさうだが鴈治郎の時も舞歌伎も終りだと感じた人がかなりあつたらしい。しかし筆者はさうも悲觀しなかつた。團菊左後すばらしい勢ひで擡頭したものは、新派劇だつた。鴈仁の死の前から映畫の普及はすばらしい。映畫は新派より本質の違ふものだから、もつと舞歌伎にとつては脅威だとする人もあつたらうが、筆者は本質的に違ふから脅威に値しないと考へた。

所謂大衆性でなしに藝術鑑賞の立場から歌舞伎と映畫とはかなり距つた分野だと思つたからである。しかし、一面歌舞伎はそのものとしての變化は如何であらう。

延若宗十郎の後の大阪は右團次(齋入)福助(先代桐玉)を中間内閣としてまもなく鴈治郎我當(仁左衛門)の兩立時代を形造つた。

團菊左の後の東京は芝翫(歌右衛門)八百藏(中車)梅幸、羽左衛門、高麗藏(幸四郎)猿之助(先代段四郎)の聯立内閣に仁左衛門を加へて、次の菊五郎左團次吉右衛門の時代に導いた。

名優の死後は一時的な淋しさはあるが時代に相續すべき人々を生まないでは止まない。多見藏は別として延宗、團菊左にしても鴈仁に較べると若かつたが、鴈仁は比較的高齡だ

つた。それに東西交通の頻繁さは、東京では菊吉左の時代ががちり組上つてゐるだけ全劇壇的には寂寞の感がすくない。寧ろ大阪の延若梅玉魁車の立場が芝翫其他の立場に似てゐるとして菊左吉のやうに現在の大阪の青年から誰が伸びて行く？ 詳しくは考ふべき問題である。

その時に東西合同青年歌舞伎が突如京都南座に上演されることになつた。東京の青年歌舞伎が我當勘彌松莖襄助福助等を包含して好評だつたことはかなり噂が高かつた。大阪京都でもかなり以前扇雀小太夫狂藏などで青年歌舞伎があつた。これは東京ほど評判でなかつたのは定打ちで研究よりも興行本位だつたためと見られぬこともない。その他にもいろ

原因はあるだらう。
扇雀が青年か成年かは二段として

繁華街に近く……交通至便・閑雅な和洋室！

モダン階上浴室新設

南地ホテル

南海難波新地戎橋停前

電話南四一四・四四一番

一宿
二圓
三圓
半額

六十の若旦那、四十の坊んの存在した歌舞伎の世界ではまだまだ青年であらう。自ら青年の氣でやつて貰つた方がよい。

とにかくそれらの若手のうちから東京から我當勘彌松遊鶴之助、大阪から扇雀成太郎丑藏の御曹子級を揃へて顔を合せせ、しかもその内主だった我當扇雀勘彌の三人はともに遠からぬ過去に於て父を喪つた人々である。

随分追昔追憶の好きな劇壇ではあるが若い人々に對し不似合な抹香臭ひ名を付けはせずたゞ狂言を鴈仁顔合せの憶ひ出の寺子屋を出すことになつた。不圖したことから多年確執した二人が久々で顔を合せた狂言は沼津だつたが、若い我當に平作でもなしと、同じ憶ひ出の寺子屋になつたのは役柄の均衡からもさうなる所

であらう。

たゞどんな風に二人が父の藝質を繼ぐか興味である。扇雀はおそらく鴈の源藏を彷彿させるであらうし我當は仁左の松王をどの點で活かし受けるであらうか。それは開場後のお楽しみである。

その他に扇雀の紙治の炬燵がある櫻丸も鴈の美しさが記憶にある。我當の日本駄右衛門も仁左が南座で勤めたのは大正六年の羽左の辨天小僧宗十郎の南郷の時だつた。生きてゐる小平次は先代勘彌が菊五郎と共演して評判だつたものである。

つまり、三人が三人ながら亡父の役々を踏襲して世に向ふことになつたのである。こんなにはつきりとみんなが父の役を並べて出すことは珍らしい。こゝに芝居の相續時代といふ感を深くしたものである。鴈仁の死後の印象がまた新しいだけ技藝相

續の現れがはつきりこたへるのである。

先達つての猿之助の勸進帳も歌舞伎相續時代の先驅と考へられないことはない。しかし、段四郎没後歲月もあるし、今度の人々とは年齢の差もあるので別とする。

今度の場合、役を相續するのは誰でもできる。問題は藝を相續し得るか如何にある。世襲財産にしてもこれを蕩盡するも活用するも享けた人の腕次第である。幸に財産と違つて相續税がかゝらない。みんなが腕いづばいに努力することを希望するそして父以上の偉材になる第一歩を樂いてほしい。

相續物ではないが我當の多九郎もよからうし、勘彌の辨天小僧も羽左を思はせやう。遺産ではないが成太郎のおさんも魁車譲りで試験済のもので嘗て推賞したことがある。

★ 當 我 ・ 彌 勸 ・ 雀 扇 ★

オ リ ト い し ら す め

郎 一 孝 橋 大

今月の京都南座は、扇雀、勸彌、我當と云ふ珍らしい東西若手の合同劇で各々先輩なり親譲りなりの舞台藝を何處まで繼承して行けるかと云ふ一點に問題の中心が懸けられてゐる興味ある舞台である。これを機会に此の優のグリンブスを描いて見やう。

▲ 扇雀

扇雀は幸か不幸か最も故成駒屋の容貌に近い人である。扇雀自身も無意識のうちに父の仕草を真似、しかも器用に真似て行けることに自然と興味を覚え、それを一つの賣物として今迄の舞台を踏んで来た。これは成駒屋なき今となつては扇雀の舞台を見れば若き日の成駒屋を偲び得る懐古的な役目を果す上に一つの役目を持つ様にはなつた。とは申せ扇雀が此

の事一ツを身上として、今後の舞台生活を續けて行くやうでは心細いではないか。此の人は子供芝居時代から座頭格で進んで来た人で、それだけに早く大成して終つた観がある。他の人が三十年もかゝる所を僅かに十年足らずで覚え込んで終つた形である。その結果、子供心に悪戯らに先輩の仕草をその儘に、何の自分の考證も加へずに呑込んで終つた體度が、成人後の今日になつて、此の人の藝術の一部分に何かと支障となつて現れてゐるのだと此の人の舞台に接する度に考へぬことはないのである。處が、最近に至つて思はぬ好技を示されて驚かされるのが偶々あつた。此の春中座での孝子傳に於ける娘役や、追悼興行に於ける「すし屋」のお里なぞがそうである。これは眞とに良き此の人の一面であつた

人の少い關西歌舞伎界にあつて扇雀も亦重要な位置を占むる人であるは勿論の話。その器用さにあまへて廣い役柄で進むよりは、むしろ狭くとも深く掘り下げて行く信條で、今後の御精進をお願ひしたい。

▲勘彌

勘彌といひ、後で述べる我當と云ひ共に關西ではどちらかと云へばお馴染の薄い人である。尤も我當は千代之助時代は關西で育つた人ではあるが未だ未知數時代のことであるから論ずるよすがもない。で共に多くを語れないことを遺憾とする。扱、勘彌は如何にも江戸ツ子らしいスツキリとした姿態や容貌に恵まれた人でこのことは延いては羽左衛門の後繼者として自他共に許すに至つたのである。それに加ふるによく先代勘彌の演技をも受け繼いで、ある程度こ

なして行けるだけの器用さをも持ち得てゐると云ふ、眞に恵まれた舞台素質のもとに歩んで来た人である。然し好漢惜むらくは未だ若冠の怨みがある。此の人に將來羽左衛門だけのヒレが付き、先代勘彌だけの深刻味が加はる時期が来れば、岐度次の時代を代表的な江戸ツ子役者としての人氣を背負つて立つ日が到来することゝ考へる。彼は今、しうかから

勘彌と云ふ由緒深き名跡を襲いだがこの立派な名跡に對してあせらずに自重ある堅實さで進んで頂きたいと思ふ。そして何時だつたかの顔見せで、忘れもしない先代の「良寛」に子守を踊つたあの純眞さを信條として……

▲我當

父を亡くしてからの此の人は非常に評判がよい。今の若い人々の間で、

最も古い演出の數々を研究してゐるのは此の人だそうである。彼が毎月青年歌舞伎で演じてゐる大役が、識者の間にあつて殆ど好評を博してゐるのは、全くこの努力の賜と申してよからう。處が先刻も述べた様に我當は殆ど關西では公演してゐないので、僕は只、それ以外のことは知るよしもない。今月の南座で一等興味をひかれてゐる點は、我當が見られることかも知れない。唯此の人が新劇はやりや新人はやりの中にあつて、悠々と古典物の勉強をしてゐる體度は、よく歌舞伎役者の身の程を心得たものとして、末恐ろしいものを感じるのだ。

● 新作劇上演の可否 ● 西田眞三郎 ●

今月の關西歌舞伎が新作を主としてゐる事が一つの話となつてゐる。それは勿論關西の歌舞伎劇及俳優に關心を持つてゐる人々の間には賛否の論があることであらう。

鷹治郎没後の大阪の歌舞伎の興亡と言つた事が今日の關西劇壇の大きな題目とされ、その一舉一動が何かしら問題視され、わけて歌舞伎劇そのものゝ衰頹とか凋落といふことが劇壇全體の問題となつてゐる現在、歌舞伎俳優を新作劇を主潮とした流れに投ずることは確かに概念的にも考慮されなければならぬ事であらう。

言はず新作物にその場限りの苦勞をするよりもつと傳説ある歌舞伎劇に全身を打ち込むべきであるといふ説もあらうし、現在の俳優に眞の歌舞伎は求められない以上新作劇をやつて貰つた方がいゝぢやないかと云ふことも言へるわけである。

歌舞伎は團菊左の時代を限つて既に亡びてゐるなど、言つて了へば最早今日歌舞伎は問題ではないが、たとへ

現在から遊離してゐるものとしてもその傳統は傳統として受け續いで行く可きではなからうか。

さき頃右團次、吉三郎らの俳優たちが「四谷怪談」をや
り石川五右衛門をやつたりしたことも、或はつまらない
と一笑に附した人もあらう。所謂一世を風靡したかの觀
がある劍劇のファンから見ればあの浮見堂の殺陣などは
全然興味がなかに決つてゐる。また「辨慶上使」に於け
る吉三郎の辨慶、霞仙のおわさ、延二郎の信夫のトリオ
など全くお目だるい觀客があつたにちがいない。しかし
それは少くとも何等かの比較感であるが吾々は霞仙とい
ふ一箇の未完成な俳優の熱のあつたことに満腔の敬意を
拂ふのである。あゝした熱と力に依つて僅かながらも歌
舞伎の香を感じそしてまた育つて行く俳優を見ることが
出来るのである。

これは私の一つの偶感にすぎないが、所謂若手とは言
ふものゝそれがあつた一つのレベルの低い劇團なり俳優な
りがピンと張り切つて懸命に舞台を勤めてゐる點には、

毎日この切抜の恩恵にあづかつてゐるがその何分の一かが私自身が拾ひ者にされてゐる、落した物を拾つて貰ふのはたんまり入つた財布の場合は大いに有難いが時には自分の落したおならまで拾はれて丁寧紙袋へ入れてこれがあなたのおならでゑると嗅される場合もある、こんな拾ひ物は拾はれる方で恐れ入るがへな顔も出来ない世の中である。

おなら或は屁は元より臭い所に價値がある、それにお前の屁は臭い〜と云つて無暗に嘸し立てる連中がある、昔は屁をひる事を商賣にして如何なる屁もひり分ける屁の曲藝師と云つた屁ひり男の名人があつた事も又その屁のひり方を楽しんだお客のあつた事も有る名な書物に出てゐるが今日でははこう云ふ屁ひり男の名人もゐらず又屁を觀賞する達人もゐないその癖屁を問題にする

人種が益々増加してゐる。

あの人の屁はすつきりしてゐて臭くないがこいつの屁はコリがあつて執拗で臭いと云ふ然し屁の本来には變りがない、音響、臭味共に屁の本来の姿であつて勿論變化はあるとしても「己れらは何がおかしい隠居の屁」もあれば「屁をひつておかしくもない獨り者」の屁もあれば花嫁のおなら、私たちの最後屁等甚だ氣の毒なものや苦しいものがある、此處に云ふ代表的な「うちの最後屁」はその臭味に於て古今に有名である。

だから私も亦五郎の屁は臭い〜といくら臭がられても屁とも思つてゐない。

これ位屁を落せば拾ふ人もはり合ひがあらうと大いに屁を落すことに努力してゐるが屁の材料を仕入れるのも一ト苦勞である。

新聞切抜は又この「きつまいも」的恩恵を多分に興へてくれる、これは一盛三錢以上に安い、いくら安いからと云つて喰べすぎて腹をこわさない用心にこの邊で止めておくが要するにこの屁論のけつ論に一發はなしたい事は今月各座の芝居を見ても感じた事だが芝居の幕切に劇の中心人物を引込めての並びの諸士のたわ言で幕を締めたりこれは一例だが恐らく明治時代のボンヤリ劇の影響からか日本の傳統的演劇として歌舞伎的演出法を没却した幕切はスカシ屁を噴まされた様で味氣ないこれは矢張りチヨンと木頭が入つてサアお聞き下さいと大いに豪傑屁をはなつてくれる芝居が見たい。とんだ空財布に臭い話で御迷惑様でした。



★
梅野井秀男を語る會
★

京都の高谷伸、森はのほ、西尾福三郎氏が、
角座に梅野井秀男を訪問された。その機会に
三氏にそれ／＼印象を語つて頂いた。

(村上記)

出席者

村	鳥	西	森	高
板	井	尾	ほ	谷
藤	富	福	の	
上	大	三	ほ	伸
	男	郎	氏	氏
勝	也	氏	氏	氏
二	氏			
氏				



鳥江 梅野井君が居ませんから、

忌憚なき處を仰有つて頂きたいもの

です。先づ森さんに――梅野井の樂

屋に於ける第一印象を伺ひませう。

森 憧れてゐた？梅野井君の第一

印象は舞台よりも小柄に見え、案外

若かつた事で、私はもつ齡のいつ

て優たつと想像してゐたのですか

鳥江 梅野井君にお逢ひになつて

あの樂屋で男優に接した感じだつた

でせうか、とれとも女優の樂屋を訪

問された感じだつたでせうか

西尾 想像以上の男性味を感じ、

どつちかと云へば男優に逢つた感じ

です

森 まア歌舞伎役者の女形といふ

感じですね

鳥江 舞台の梅野井に就いて何か

……

森 私は惚れてゐますね、舞台の

梅野井君には……

高谷 體のしな又台詞廻しに色氣

がありますね、甘つたるい色、甘美

が漂ふこは確かです

鳥江 河原市松は舞台は女性的で

樂屋は非常に男性的だつたですが、

あの河原よりも舞台の梅野井君は陰

影があつていいやうに思ひますが

西尾 華やかさと哀愁があります

ね

森 兎に角、一つの色――特色が

ありますね

高谷 その特色を大いに發揮して

貰ひたいものです

森 額田氏の呼子鳥の老役はよか

たですね

鳥江 ぢや、今後の梅野井君の役

柄について語つて下さい

森 梅野井君の役柄はそんなに廣

くないと思ふ。

高谷 非常に適する役適せない役

があるやうに思ひますが……

西尾 舞台上の注文の多い優でせ

うか

鳥江 割合にね

森 ともかく行き詰りのない様脚

本を撰ぶことでせうね、例へ老役が

うまくても、長襦袢姿で賣るのが本

當でせう

高谷 自分のエロテシズムを利用

するんですね

西尾 あの優の師匠は？

鳥江 ないさうです、まア獨立獨



歩ひです

高谷 萬才まんざいのエンタツが一座いざに
た、といふぢやありませんか

板藤

満洲朝鮮まんしゅうしやうせんで、小中村千代千

兵衛へいゑとして、子役こやくで物凄ものすごい人ひと氣きがあ

つたさうです。その時分じぶんエンタツ君

もゐたのでせう、だから、現在げんざいでも梅

野井君のゐいが満鮮地方まんせんちほうへ巡演じゆえんすれば、斷

然大入ぜんたいいりださうです

鳥江

梅野井君うのゐいちよつと梅蘭芳ばいらんほうの

感かんじがしますね

高谷

それぢや一つ満洲まんしゅうを背景はいけいに

した脚本きゃくほんはどうでせう

村井

きつと受けるでせうね

森

それで満鮮地方まんせんちほうへ巡業じゆんげふするの

です

村むら上

では、この邊へんで、どうも色

々く有りがたうござりました。

次 號 二 十 月 是 見 世 特 輯

定 價 三 十 五 錢 一 十 月 三 日 發 賣

結 核 症 患 者 友 誼 會

… 花 柳 病 科 …

藤 原 醫 院

★ 電 話 二 六 三 六 番 ★ 戎 橋 筋 溝 側 入

結 核 症 患 者 友 誼 會

淋 病 患 者 友 誼 會

淋 病 患 者 友 誼 會



◆ ◆ ◆ 私の女房役と ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ 劇團の變轉 ◆ ◆ ◆
(2)

都築文男

成美團の隆盛に伴つて、我が水都劇界の良夫役として認められた自分の女房役に、英太郎、酒井欣彌、末吉春人、舊派の片岡愛之助その外、松竹女優養成所出身の富士野蔦枝、和歌浦糸子、常盤操子、東愛子(當時最年少者)園田弘子、河合新子、關某……等々……と、舞台に於ては家庭圓滿で誠に幸福者です。
色癡だつて……冗、冗談じやないですゾ……。

だが離合集散は世の倣ひとか、逝くものもあれば、走り去るものもあり、自分の女房は轉々としてゐた。
愛之助は、舊派に還り、酒井欣彌氏は急逝し、愈々女房役に沸底を感じるの時、彗星的出现したのが、木下八百子だつた。
續いて川田芳子も加盟した。
時、恰も大正九年、我國では歐洲戦禍後の黄金に飽満した好況時代、劇界もその餘波を蒙つて、舞台上尻

お前は男だ
だが心の中に潜む「女性」に魅せられ詠かされ
その苦悶が怪奇な表情となり描線となつて私共の眼前に踊る
お前の首は不自參だが蠱惑的な角度を作りつり上つた眼を脹らまして實際の女が知らない催眠的な世界を覗き込む。お前は心の中に苛立つ感受性に惱まされて幻の傀儡となつて顯はれ
私共の常規的世界を掻き亂すために輝く星だ
お前は惱しい美しい夢だ。
——これはヨネ・ノグチ氏が女形と題した詩の詠嘆だ。私は樂屋に——懸崖の黄菊の香が立迷ふ小ぢんまりした鏡臺の前に、湯上り姿の梅野井君と初めて對座した時、この詩の文句が頭の中に蘇つて來たのである。
舞臺で見るよりは小作りな、瘦さず

井野梅の屋樂
井野梅の臺舞
ほのほ森

を叩いてゐても客が来ると云ふ底を知らぬ盛況振り。

當時、國際活映株式會社直營の千日前の樂天地から買収されるが儘に木下八百子を女房役として現在一座の山口俊雄君、野澤、高濱等若手連を引具して、正劇座と銘を打つて、彌生の中旬を期して反旗を翻がへした。

現今、東寶が松竹俳優の引拔に暗躍してゐるのとよく似てゐる。

然し當時の樂天地は場所が千日前であるといふ丈に道頓堀を離れる事は、俳優にとつて、淋しいやうな羞かしいやうな氣持になるのが通例だつた。

俳優のみならず観客迄が樂天地の役者はレベルが低い、と思つてゐる。

故に、何かの好條件が介在しない限りすゝんで行くものはない。

而し、この交渉に轉じて居るのが

當時有力なる某新聞記者や、現在松竹に重要な位置に在る御歴々……直接運動者が、例の大平野、野氏や、服部秀氏と云ふ手具脛ひいて何か事あれかしと待ちあぐんでゐる猛者連中。

そこへ、物質は御望み通りといふ好餌に、若い俳優を人生の歧路に惑はしめるのだ。

自分としても凡そ萬と言ふ前金を借りられるし、松竹の三倍額に昇給するし、自分の要求は何でも通せるし、剩

さへ我儘の言ひ放題、まるで千兩役者に成つたやうな自惚れで、「花道の無い芝居が出来るかテンだ」なんて嘗て休演した事のない樂天地を一日全休さして無理に急造の花道を拵らへさしたもんだつた。

當時豪華を誇つた螺旋階の大建築の樂天地の舞台上、花道を作らした事は

な彼——肩や腰や腿のあたりに、あの惱しい媚態を醸し出す愛慾の醗酵素が隠れてゐるのは見過せないが、舞臺の彼女——彼が扮するそれぞれの女性とは、其處に大分の隔りがあつた。

梅幸、松蔦、芝鶴、松庭、喜多村、花柳……幾人かの女形と私はその樂屋で膝を交へ、言葉をかはしたが、六人が六人ながら個性の相異が恐らくは然らしめるのだらう、それぞれに受取る感じは違つてゐた。

故梅幸氏には彼の人の魂、彼の人の姿をその儘に作り出す名匠のやうな感じがあつた。松蔦君には松蔦その人の舞臺の色彩、陰影、香氣が漂つてゐた

芝鶴、松庭の兩君には舞臺の華やかさを洗ひ落した、生地如若衆歌舞伎或は野郎歌舞伎の若人の、佛を見た。喜多村君、花柳君は喜多村、花柳の舞臺を一番正しく理解し、しかも一番無遠慮に批評する第三者のやうな氣がした。

自分の誇として居た事だつた。愈々完成して三月十五日初日として蓋を開けた。

この娛樂殿堂は、連日連夜、盡きるを知らぬ満員の盛況だつた。就中四月三日の神武天皇祭の如きは、一日の収益、萬を越へるといふ未曾有の成績だつた。

遂に五ヶ月間のロングランに入り、その年の九月には、京都の歌舞伎座を借りて、始めての旅興行に出る事になつた。

然るに好事魔多し、女子と小人は何とやらの諺の如く、木下八百子の横暴振りには、一座総員の憤満の的となつた。

自分としても可成座員の慰撫に勉めた積りだが、内心はあまり面白くなかつた。

處へ松竹からは手を代へ、品を代へて復歸を追つて来た。殊に女房役としては山長をオミツトした、故人河原市松といふ當時賣出しの花形、私の心は動搖し始めた。

何とか二ヶ年契約の國活に對して如何なる方法にて脱出せんか非常に心を痛めた、時も時、折も折、舞台上にて木下八百子が餘りにも先輩たる自分を侮辱した行爲があつた、それは、自分の門下荒尾誠一と其子、都一男といふ天才名子役秘藏弟子の母親が、梅坊主のかつづれの一行で登場する。其ヤートコセの三味線を知る者がなかつたので、幸ひにも其母親を舞台に立たしたのだ。然るに木下は、子役の母親を舞台に出したといふので非常に立腹して、板つきに自分と一緒に出るべき茶屋場へ其姿さへも見せなかつた。

樂屋の梅野井君は、それらの人々とも違つた感じだつた。それらの人々の持たないものを彼は持つてゐたのだつた。私の氣のせい、か、彼は力めて「男性」を取戻さうとしてゐるかに觀えたが、彼の何處かに潜在してゐる「女性」の影が識らぬ間に時々閃いた。松蔭君にも同じ現はれを見るが、梅野井君には一層情感をそそるイツトがある。これが舞臺の上で、あの蠱惑的な、煽情的な媚態を生む源泉なのだらう。

女形は日本の劇に於いての不思議な存在だ。歌舞伎から「女形」を除いたら、歌舞伎の味、歌舞伎の氣分はメチャメチャだ。不自然な、非生理的な女形なるものも、歌舞伎にあつては決して不合理でも不調和でもない。それは歌舞伎の成分、格式が、幸にも、不思議にも女形なるものとマツチするからである。併しその女形は歌舞伎の世界のみでなく、今日のシバキの中へも勇

腹に一物ある自分は是れを絶好の好機として、退座を申出た。

さあ一座は上を下への大騒ぎ、種々の仲介者を立て、自ら慰撫してくれたが頑として應じなかつた、之れが國活との關係を縁切る動機で、其月限り、休演して了つた。

然し退座はしても前借金の返済方法は講じなければならなかつた、半年の間に借金の半を返したあとを、枕金として千圓を収めて、残額を五十圓づゝの月賦として約五ヶ年以上の契約として貰つた。

處が面白いのは其當時の樂天地の主任田村一郎氏(一名を花魁)といふ人が部下を以て、君の契約書は二ヶ年としてある其證書面の規約は正に君の方に利あり、あの借金は支拂ふべき義務なしとして、其千圓を手つかす返してく

れた。

呆氣にとられた自分は餘りの嬉しさと其田村氏の仁俠に感謝して千圓の半を割つて其使者の者にやつた。

さうして京都の京都座に於て都築河原一派を組織して、松竹の專屬として奮闘した。

之れから話は益々佳境に入るのだが紙面の都合で、次號に譲ります。

□次號 豫告□

次號にも引續いて都築文男丈がこの興味ある新派劇界の裏面史とも云ふべき「私の女房役と劇團の變轉」を執筆されます。御期待を願ひます。

敢に飛び込んで、女形の威力を依然として繼承し、燦然と發輝してゐる。愈々以て不思議な存在ではないか。内容にしても、形式にしても、舞臺にしても、演出にしても實事的な、寫實的な現代劇に、當然不合理、不調和であるべき女形が、眞の女性の女優と一緒に同じ脚光を浴びて、さしたる矛盾を感じしめぬのは、觀客の歌舞伎の女形を見慣れた麻痺性からか、或は女形に比して女優の技藝の沓えない爲か、或は生理的な優劣からか。私はそれを考究する前に、先づその不思議な存在に驚くのだ。たゞ現代劇の女形は、出來得るだけ眞の女性に表現を近づけようと焦慮する。梅野井君が若い女の役に難しさを感じると言ふのも、前述の理由からだと思ふ。併し、理性よりも感情、精神よりも肉體的に男性に愛を捧げる女は、全く梅野井君にして持つ特異のものだ。



…カッタは鴈治郎の紙治…

俳優似顔繪
頒布

劇團關西新派にあつて特異な存在を示してゐる芳賀敏兼君の畫才は余技を脱し、各方面から非常な絶讃を得てゐるが、本誌は愛讀者のため同君の彩筆に就る東西名優の似顔繪を取次ぎ頒布することに致しました。

特價・色紙 一葉 二圓（郵税十錢）

申込は道頓堀編輯部宛にて、俳優名及び狂言等御指定下さい。御注文より十日以内にお届け致します。

雑誌「道頓堀」編輯部

定價一部四十錢

「代加おとんさ使撫鎮」 演上座中
載掲等「唄の虫船」 演上座角

新劇壇・第五號・十一號

モダン地獄

大槻たもつ

(A)

天下の富豪堀川のお殿様にお願ひして斯んな畫材きこしらへてもらつたら流石の良秀齋伯も地獄變じて極樂でなにもなりかねないテ。



御曹司三花形

秋月好光

「十一月の京都南座はいつもならば顔見世を前にして軽い演し物で中頃過ぎに打上げるのが例になつてゐるのに今年は一體何うした風の吹き廻しなんでしょうね。」

「京寶劇場が出現したお蔭ですよ。「京寶」の二の替りとして壽美藏、義助、もしほと云つた人達が京都へ出演する。さうなると、勢ひこつちでも黙つて引込んでほのめられなくなる。そこでつい先日まで新宿の歌舞伎座で盟友として共に舞台上立つてゐた我當、勘彌、松遊と云つた人達を引張り出して、昨日の友は今日の敵と云ふ所で、一つ華々しい對抗戦を演じやうと云ふんですね。」

「所で早速ですが今度のだし物は何れも親の藝を子が忠實に演つてゐると云ふので三つが三つ共鴈に合同、或は鴈魁又は勘彌の小型縮刷版だとの評判ですがこの三人の御曹司の評判を一つきかして頂けませんか。先づ扇雀さんから。」
「お馴染の河原町三條、京成駒家の事なら何も今更ら私の口から事新しく話す事はないぢやありませんか。」

「でもあの人も折角これからと云ふ時にお父つあんに死別れて嘸がっかりした事ませう。お歳は幾つでした。」

(B)

「其處でキユービー君も少し凄味を出して、ア君々もつと悲惨な顔をしなくつちや。」とアトリエの良秀氏モダン地獄變のスケッチに餘念なし。



『三十四で今度の三人の中では年頭です。お父つあんに死別してからほ只管二代目鴈治郎を理想に玩辭樓十二曲のおさらへに一生懸命です。』

『將來何うするつもりなんでせう。二代目鴈治郎になれませうか。』

『そんな事は分りません。然し鴈治郎は一代限りの役者にしておいた方がいゝそれよりこの人は兄妹三人と門弟達を中心に一族座を組織してお父つあんの物や、又新しい物をみつちり勉強してほしいと思ひますね。』

(女客飛入り)

『それでは次ぎに我當さんを何卒。』

『聲屋ぢやありませんよ。』

『皮肉を仰有らずに何卒お話をきかして下さいよ。確かこの人のお歳は三十

— ? —

『恰で戸籍調べだね。我當は扇雀より二つ下の三十二です。この人も昨年お父つあんに死別れた許りでまだ悲しみの涙の乾かない所です。あの時は大阪歌舞伎座の舞台で壽秋平家物語の時頼を務めてゐた折で、舞台でお經を稱へる役を幸ひ、聲涙共に下る調子で一生懸命あの役を務めてゐました。お父つあんの眼に入れても痛くない可愛兒で、いつ迄も子供々々した所から大成を危ぶまれてゐる者が、何うしてこの頃は押しも押されぬ青年歌舞伎一座の統領です。近來ぐんと尾緒がついてきたやうです。お父つあんの神經質な一面を受ついでゐると見へてとかくこせつきたがる所をぐつと押さへてゐるのは遠がです。慾にはもつとぼやつとしてゐてほしいのですがね。』

顔見世號りよ年極御購讀を

ケ三年圓十三錢でございませぬ

「この頃の若い役者は誰れもかも一様に抜目が無く才走り過ぎてゐて、芝居をみてゐて一寸もゆとりと云ふものがありませんね。」

「同感です。彦三郎や團右衛門のやうにどつしりと落着いた役者は珍らしくありません。」

「もしく脱線して貰つては困ります。最後に勘彌さんの事を一寸お話し願ひます。」

「さてどん尻に控えしは……。」

「五人男のつらねなら今度の舞台できゝますからもう澤山ですよ。新勘彌さんのお歳は？」

「煩さいな。確か二十九だと思つてゐるが……。勘彌と云つても本當は先代勘彌の姉さんの子で、以前は玉三郎と云つてね。實は映畫の好太郎こそ勘彌の實子なんですよ。」

「どちらかと云へば先代勘彌の面影は矢張り好太郎の方に餘計あるやうだね。この意味で好太郎は早晚舞台へ轉向した方がいゝのぢやないか知ら。」

(女客) 「好ちやんのキネマ見られなくなつたら困るわ。私斷然反對よ。」

「女は黙つとれ。そこで今日の勘彌だが、今からあんまり器用すぎる事は一寸考へ物だね。今度だつて梅王、小平次、孫右衛門、辨天小僧と、こんな役を一とからげにこなさうと云ふのだから無理だ。それにしても一番若くて一番小器用なのは何うかと思ひますね。」

「さうでせうか。所で最後に東西青年歌舞伎の比較論を一つお願ひしたいのですが。」「そんな事は西洋の哲學者にきゝなさい。」

てん園を吾十外天

「夕る語をひ笑」

Z・Y・X



京都の錚々たる御連中に依つて組織されてゐる紫明會（何だか長唄の會名の様ですが）の十月の例會は、折から南座に來演中の家庭劇の主だつた方々の御來會を促して、十月十四日松竹スケート場の食堂で『笑ひを語る夕』を催した。一堂に會するもの約五十名。十吾や天外兩君



の舞臺そのまゝのジェスチャーで語る笑ひの藝談に時の經るのも忘れて打ち興じたのだつた。大橋氏のライカはこのやうに活躍したのだつたが、十吾氏一人はカメラを避けたのは如何にせん。

肩が十吾君。
寫眞 2 は右より山上貞一先生と高谷伸先生、その右に額が見えるのが天外君。
寫眞 3 は右より森ほのほ先生山上貞一先生。その後方に見える頭が菱田正男先生であります。



東京新派二階から

× ×

姉小路孝

十月の東京新派の番組を見ると中野實の作品が四ツの内二ツまで占めてゐる。而も同じ作者の手になる作品であり乍ら、受ける感じが全然相反してゐるのは面白い。即ち新派らしくなくて新派らしい「十二番の聖歌」と、新派らしくて新派らしくない「二人妻」と……。これはこの作者の職人的器用さを物語つてゐる査證と云へやう。

閑話休題、十二番の聖歌は井上の獨り舞台。勿論此の程度の本脚なれば樂々たる餘裕のうちに演りこなして行ける腕を持つ人である。されば此の本脚は井上に對しては餘りにイージーゴーイングであらう。此の點が第一私には喰ひたりなかつた。他の諸優に對しても更に云ふ程のこともなし。然るに二人妻となると、グツト調子の高いものに出來上つて居る。これは正面から描いて行けば純然たる新派悲劇である。それをこれ程の高さまで押しやつたのは全く脚色のよき、省略法の水際だつた巧きの爲と云つて良からう。登場する人物もその一人々々が悉く實在の人物に描かれてゐるし、俳優たちもその人物を生活してゐると云つて良からう。俊策に扮する井上正夫、たいしたお芝居もない役がらではあるが、この人の人徳が（何處かに人なつ

こい）よくこの狂言の空氣とマッチして矢張り他の人では、出し切れない味を出してゐたのは流石であつた。芝居を見せる「十二番の聖歌」に於ける福田吉太郎の役柄よりも、僕は芝居をしないこの舞臺の彼の方が數等上位に置かるべきものと考へる。喜多村のお雪は、只ラストの幕切れに、いそいそとしてミシンを踏む、あの一芝居だけで満足した。

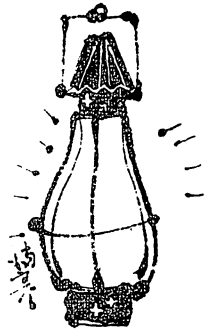
仇吉と米八は清元の地に乗つて動く歌舞伎調の演出で最初の開幕に入谷の寮を聯想させた。こんな風な演出劇を見ると歌舞伎の技巧が如何に優れた情操を興へるものであるか。今更に裏書きされた様な氣持がして、歌舞伎ファンの氣を更に強くさせたことであつた。歌舞伎の型を新派の型に取入れることがいゝか悪いかは暫く置くとして、兎に角私達にいゝ氣分を齎して呉れたことは、河合、喜多村のあの老巧な舞臺藝に依ることは勿論だが、清元の優婉な古典音樂の効果が與つて力のある事は否むことは出來なからうと思ふ。伊井の丹次郎はふやけた役だ。

婦系圖は金色夜叉や不如歸と同じく新派の古典として後世に傳はるであらうものである。有名な湯島天神境内の場

此處でも清元の地に依る型物(?)がある。しかし仇吉と米八と違つて、數度舞臺に登つて工風を積まれてゐるだけに歌舞伎の臭ひはズツと稀薄になつて、新派のものになり切つてゐる點は、前者に優らう。花柳のお蔭は先生程の艶氣はないが、その更り一心に思ひつめる純情さはあふるゝばかりの可憐さがあつた。きまりの型も繪の様に美しい姿態



だつた。柳の主税が案外によろしく、大矢の酒井は矢張り他に眞似手のないパーソナリテイで舞臺を壓してゐたのは特筆すべきだ。見るたびに好きになれるのである。(寫眞説明——1は仇吉と米八上の巻喜多村と河合。2は同じく河合と伊井。3は下の巻河合と喜多村。)



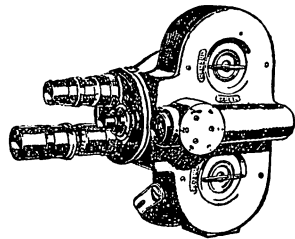
— 芝居印象記 —

歌舞伎座と浪花座

西尾福三郎

先月異状なヒツトを見せた歌舞伎座は、又々今月も素破らしい好成績を見せて凱歌を奏してゐる。劇壇の秋愈々稔豊かな現象は御同慶の至りである。新作時代來るとの聲を頻りにきくが、何か無しに渾沌たる動搖のさ中に、ひしめく氣運が仄かに感じられるのは心強い。とは云ふものゝ新作が單なる眼新しさだけであつてはいけない。それよりも、新舊を通じて良いものでさへあれば客は來ると云ふ事になるのではない。所で名作揃ひと銘打つた歌舞伎座の狂言が果して名作許りであつたか何うか。興味の中心になつてゐた二人妻は二筋道以來の世直し狂言と云はれるだけに作品にも演技にも相當見答へがあつた。第四場悦子の家で君子、精二、新吾、俊作が二つの火鉢を中心にしてズラリと一列に並んだキチンとした形の中から、いかにもこれから何事が波瀾が起るらしい一種の緊迫した感じを胎んでゐるよかつた事、それから幕切れでお雪がミシンを踏んでゐる所へ父歸るの電報がきて、それを娘から母へ母から幼い子供へ廻して最後に讀ませ、イソ／＼としたミシンの音と欣舞する子供を見せて幕にした手法の巧き等強く印象に残る。たゞ滿洲の山本の家を訪ねてくる君子の服装がこの家の道具や建物の地色の爲に殺されてちつとも眼立たない。君子が帽子をきたまゝな爲二階以上の客には顔の表情が分らない。表情と云へば君子の顔を洋装向きに赤くメイクしたばかりに、變に下品に見へたのも一考を要する。花

フィルム



十六ミリ界の
最高峰

未だ會てフィルムモカメラで影して失敗があつたか？
未だ會てフィルムモカメラで一呎のフィルムが浪費されたか？フィルムは映畫になると同時に最も優秀なるカメラマンを兼ねボタンを押し給へ貴下のなされる事は唯それだけだ

(早進グロタカリあに店ラメカ流一國全)

BELL & HOWELL CO. U. S. A

柳が洋装して俵からの降り方や、座り方に苦心してゐる點は分るが、この場は矢張り以前所演のまゝの和装の方が第一色彩的でよかつた。

婦系圖もよいものであるが全部で十一場の所を七場しか出さずに全體の筋を通さうとするのはちと無理である。賣り物の湯島境内を除いたら見る所がない。小芳の俠氣もめの物の男氣もすつかり台無しである。花柳と柳との湯島も何様代表的な新派の名狂言だけに見てゐて悪い氣はしない。然しこの二人は所詮鏡花物の世界の人ではない。何と云つても鏡花物は喜多村、河合、伊井の三人を最後として、今日演ぜらるゝ所謂若手の鏡花物はその複製品として別の立場より見なければならぬ。これは敢て若手を軽くみた爲の云ひ方ではない。

つまる所は時代の空氣或ひは肌の違ひの問題である。この肌の違ひを立證する一例として仇吉と米八の一篇をみても分る。梅曆の中からお寶詮議の條りを除き去つて單に仇者と米人と丹次郎の三角關係だけを主題にして二人の女の氣持を微細に描いたのは如何にも女の作者らしい、そして喜多村、河合向きのよい思ひつきである。こんな芝居は次の若手でやらうたつてやれるものではない。そこに初期新派人と次の時代との肌合の違ひを感じる。型から見れば河合も喜多村も凡そ辰巳藝者とは縁の遠い格好の人である。素足に羽織、鐵火な口調に男優りの心意氣、さうした江戸の名残りを今では歌舞伎の舞台でさへ思ひ通りには見せて貰へない。それが何うにもせよ河合、喜多村で見られたのだから珍重である。

新しい新派の將來を二人妻で、そして古い新派の昔の姿を仇吉と米八で見た我々は、婦系圖と十二番の聖歌の中に、それこそ迷つてゐる現在の新派の姿を見た、とまあさう云つておかう。

浪花座の前進座を觀てゐると主として中所の人達が追々と巧くなつてきた事

毛谷村

妹青平三

お園と六助の許婚同志が初對面の挨拶をハニカミ乍ら取りかわす六助「お寫眞とは大分瘦せてますネ。」

お園「あの、チヨット赤十字病院へ入院してましたの……。」



が分る。

十月の芝居街へ二本立ての狂言を携げて出演し、三方の強豪を向ふに廻して堂々互格の戦ひを見せたのは偉とするに足る。

然しそれは表面の興行成績だけの事で、演し物は前進座として果してこれで申し分が無かつたか何うか。黠くとも私一人の好悪から云へば新國劇の演し物の方へ讚成したいと思ふ。

悲戀の白拍子は翻案物とは思はれぬ程消化されてゐた。然し一言で云へば前進座向きであるにも拘らず印象は案外非前進座的だつた。やゝこしい云ひ方だが、前進座ならもつと何うにかなつたらうにと云つた感が残る。古劇をやれば案外な味を出すこの一座が、單に史劇的取扱ひだけで片附けてしまつたのは惜しい。もつと重く大きく演つて大歌舞伎そのものの野心があつてはしかつた。

清盛館の手挾な酒宴、悲戀を包んだ白拍子の踊りの間の苦悶の表現にも、又最後の火中の狂舞にも、もつと／＼表現すべき時代物演技のコツを知らない人達ではない筈である。かうした王朝物ならコスチュームブレイとしてもつと壯大に取扱ふのもよい。或は又、大時代な歌舞伎風に表現するのも悪くはない。たゞ新劇風な素の味をねらつたのなら、そしてそれが前進座のモットーだと云ふなら私としてはこれ以上云ふべき理由はない譯である。

清水の治郎長は夏薙いておいたキネマ種を秋の芝居で取入れやうと云ふ頗る樂な演し物である。演る方も樂なら見る方も樂、然し前進座の芝居はこんな樂々とした芝居ではなかつた筈だ。もつと苦しめ、もつと藻掻いてくれ、と敢て要求したい所である。

長十郎の治郎長は貫祿だけの事はあり、甞右衛門の石松はむしろ樂々としたものだ、殊に助藏の勝五郎の飄逸味は何處やら往年のフランスの名ワキ役ニコラスコリンを思ひ出させる所があつた。

あやつり三番叟

妹 青 平 三

浪花座へ初出演の栗島すみ子、自分の娘の栗島壽子といふ十二歳になるのを舞踊の跡取りにするんですと大變な力の入れ方三番叟の後見では、それ足を、それ手だよと、イヤもうキツイあやつり三番叟



Papilio

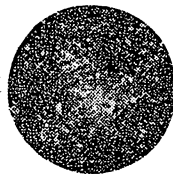
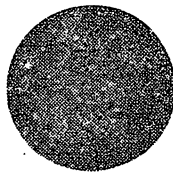
オークル化粧をなさるみなさま!

なんだかこの頃お顔にシミやソバカスが増えてお顔が赤つぽくなつたとお思ひになりませんか?
それはこれまでの粉白粉は五十倍の顕微鏡で見ると色素の生のまゝの塊が混つてゐてそれが皮膚をソバカスの様に染めてゐたのです。くどくは申せません。つまり此の恐るべき色素の生の塊がなくなつたのがパピリオなんです。寫眞を御覽下さい。嘘だと思つたら藥局で顕微鏡でどんな粉白粉とでも比べて見て下さい。キメどかノビどかこれこそ本當に世界一の粉白粉だと専門家が口を揃へて言ひました。
巨額の費用を使つて伊東化學研究所がフランスとの競争に勝つて、遂に世界一の粉白粉が日本で出來てしまつたのです。

パピリオ
この美しいきめご
純粋さをみて下さい。

フランス品
さすがに分子は細いですが
未だあるこの黒點が
恐ろしいのです。

これまでの粉白粉
分子からして荒いでせう
この黒點が色の生のまゝの
かたまりなんです。



パピリオ

十二色
粉白粉

肌色三種・濃肌二種・黄肌・
カカオ・桃・黄・緑・紫・白・
有名藥店化粧品店デパートにあり
試用品は二錢切手封入お申込の方に
進呈します
定價：六十せん

信州の相馬踊

曾我廼家大磯

二十年前信越の興行に行つた時新潟大竹座の座主に座員一同が土地の料亭鍋茶屋へ招待されて顔つなぎの宴があつた席上土地の藝者から名物相馬甚句おけさ踊の餘興を見せて貰ひ大いにメートルをあげ歸りに廓へくり込んでそこで又オイラン仲居子守まで總出演の踊のサービスがあつた。イロリの切つてある部屋で所謂新潟美人が絹物の様なスベ〜した肌をそのまゝ……その一ト夜の雪國情緒にえも云はれぬものがあつたのでそれを今度一座の老いて益々盛なる五樂翁に話した處早速出かけたらしいが甚句も踊りもなくその上寝巻も着たまゝで甚だサービスが悪かつたらしくアテのはすれた翁からエライ駄目を喰つたのですまん〜と思つてゐる内、信州上田へつくと宿屋へ藝者が入つてそれが新潟産の藝者で踊も甚句もうまいと云ふので早速五樂

衛 生 口 錠 口 中 殺 菌 劑

力 大 一 丸

本 舖 自 製 安 井 筒 堂 藥 品 部

翁に御馳走した處宇頂天の喜び方であつた。その夜五樂翁とお引けになつた藝者は果してノートパジャマであつたかどうかそれまでは此處へかけない。

思はぬ山行

曾我廼家蝶六

十月の月上旬一週間ばかり信越地方へ巡業に出た、その折當地方の出水驛ぎで乗つた汽車が水上温泉の手前上巻邊で不通になり約二時間ばかり復舊工事が終るまで待たねばならなくなつた、サア大變山中の小驛ではあるし驛から町へ出るには大勾配の難路で二時間の間どうする事も出来ない處か此處は風景絶佳と來てゐるので地酒を一升計りとメザシ、アタリメ等を買ひ込み驛の一室を借りてチビく呑んだその甘味さつたらない。災難變じて幸ひとなり天の與へと云はうか思はぬ山行きが出來て忘れられぬ旅の思出となつた。

巡業みやげ話

× ×

ケノンツト号

萬人愛好の撰良車



國産品中の完璧

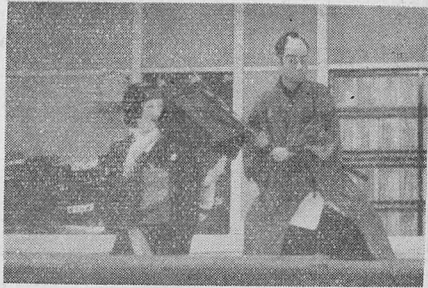
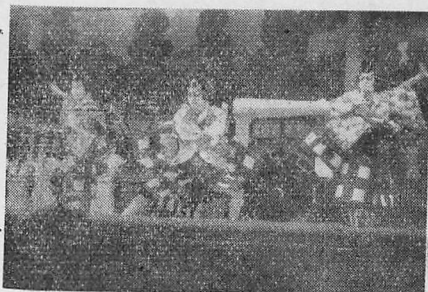
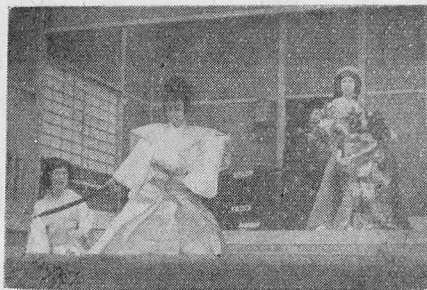
是非御愛乗を

市内特約店ニアリ

株式会社 大澤商會
京都市三條通小橋西

でカイラ 年 青

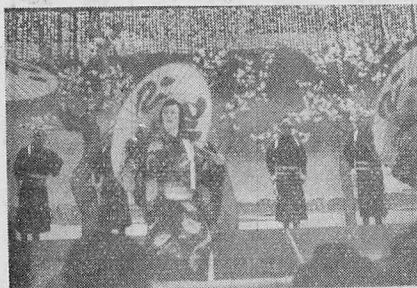
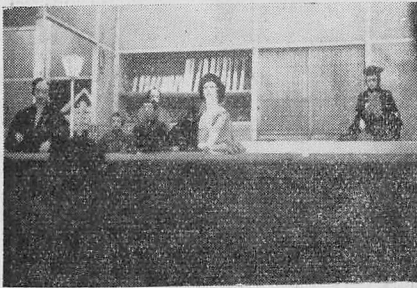
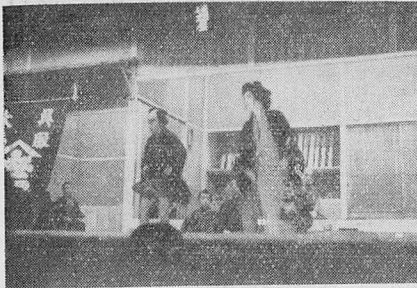
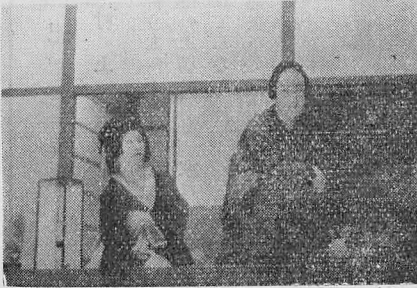
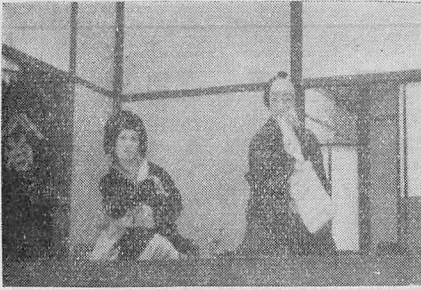
橋 大



- 我當・扇雀・勘彌の珍らしい青年歌舞伎。初日の名技をライカで描いた舞臺面の美しき、面白きをお目に懸けやう。
- ・1・ は車曳吉田社頭の場で三人の顔合せがある繪の様な舞臺。何れも立派な出来を示すが、我當の人形を眞似た顔の作りが面白い。
 - ・2・ は寺小屋で首實檢の場面、扇雀の成駒屋ばりの源藏に、我當の松王が近來の松王だとの評判しきり。前途ある名技を見せて、大向
 - ふをうならせる。
 - ・3・ 源藏の首に相違御座らぬ……只、熱演。
 - ・4・ 鶴之助の戸浪は動きは少ないが、好感のもてる人。「生きてゐる小平次」では年増女の色氣をフンダンに見せ、「濱松屋」では六代目そのまゝの鶯の者を見せる等、中々器用なものである。
 - ・5・ 松廷も中々よい。姿態の美しいのが何よりの徳。源藏もこのあたりまで来ると、汗をボタボタ落

たい描 伎舞歌

郎 一 孝



すほどの熱演だ。「首、お役にたて、下さつたか……」

- ・6・ 我當の松王、愈々腹のあるところを見せる幕切れのきまり型。
- ・7・ 紙治は終始鷹治郎聯想の一幕おさんの心をみせる最初の場面。
- ・8・ 初めて知つた女房の心根。
- ・9・ 太左衛門を殺して、これから二人は死出の家出。近松もの特有の味だ。
- ・10・ 勘彌の「辨天娘」は羽左衛門のお手本を忠實に眞似て遺憾がない。

- ・11・ 辨天小僧の菊之助……ときまつた所。我當の駄右衛門は、此處でも柄を見せてゐる。
 - ・12・ 勢揃で美しく打出しとなる。寫眞は勘彌のつらねを云つてからのきまつた型。
- 扱來月は何處へレンズを向けやうか。

—— 三日 ——

編輯後記

村上 勝

中座は新作古典物と併立した本年掉尾の大歌舞伎で、殊に地獄變の上場は、好劇家に興味と話題となげがけてゐる。

南座は我當、勘彌、扇雀のトリオで、顔見世をひかえた京都でそれ／＼が親譲りの至藝を見せてゐる。

歌舞伎座へは五郎劇の歸演、浪花座は栗島すみ子の旗擧げ公演、角座は關西新派の續

演神戸松竹劇場は家庭劇と、將に演劇の秋である。

本誌も次轉「顔見世號」をひかえて、ベストを盡したつもりで居るが、お眼だるい處は、御教示を乞ふ。

別記の通り新社屋竣成と共に當編輯部もその方に移りましたから、通信その他左記の處にお願ひします。

終りに、本誌のために、御多忙にも關らず玉稿を寄せられた諸先生に誌上より厚く御禮申上げます。

謹告

拜啓秋冷の候愈御清祥奉賀候
扱今般元地に新築落成十一月五日より移轉營業致居
候間不相變御眷顧の程奉希候
先は御通知申上候

昭和十年十一月一日

頓首

大阪市南區久左衛門八番地

松竹興行株式會社大阪支店

電話南(六)六五三一―六五三六
(六)六七三二―六七三五

昭和十年十一月一日發行

月刊「道頓堀」第十年
雜誌「道頓堀」第一百十號

誌代は前金でお拂ひを願ひます。
郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社
大阪市北區中之島三丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金參拾錢 (郵錢五厘稅)

昭和十年十一月一日印刷
昭和十年十一月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹興業株式會社大阪支店

發行者 鳥江 鏡也
共同編輯 山上 貞三
印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹興行株式會社大阪支店

發行所 道頓堀編輯部

あぶら取紙始礎 辻と添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉
スキナ石鹼

専賣特許 審用新案

スキナ御化粧紙

(あぶら取兼紙白粉)

各品共御愛用を乞ふ!

標商録登



大 阪
發賣元 朝日堂株式會社

大 阪
本舖 中田スキナ屋謹製





固形淺田飴

適應症

せき一切、感冒、喘息、百日咳
 虚弱、貧血症、病中病後、肺病
 肋膜、老人小兒藥さらひの人

秋がさよならすると、いやな
 冬が感冒や咳を持って訪れて來ます
 咽喉の保護に呼吸器病の豫防に



(各藥店に取次す)

本舖 東京 堀内伊太郎
 大阪

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
 昭和十年十一月廿一日印刷(毎日一回)
 昭和十年十一月廿一日發行(毎日一回)
 昭和十年十一月廿一日發行(毎日一回)

「道頓堀」 第百十輯 第十年 十一月號

一部金夢拾錢